住まう道　寄り添う町

「道」とは、町の変わらない場所である。「道に住まう」とは、そこに愛着を持つことである。
本提案では、「道に住まう」ことによって、町が継承され、世代を越えた彩りが
生活に生まれる富山型コンパクトシティにおける徒歩居住圏のあり方を提案する。

町をつなぐ展望台

二つの学校をつなぐ道を幹線道路を渡るデッキ化し、道路上の空間を町を俯瞰して眺める場とする。立山連峰を背景に、ここから見える風景は自分の町という想いを胸に抱く場所。東西に伸びるスロープで上り、道の交点としてみんなが利用しやすい形態とした。

住まう道から町のつながりをつくる

住まう道のデザイン

道は町の要素の中で更新頻度が低く、町に長く残る。周りに建つ建物が更新されていっても町の面影や雰囲気を継承する為に、道にそれぞれキャラクターを与える。
道の主な利用者から3種の道を設定する。さらに3種の道に今ある町の様子とこれからの町の姿を考慮し細かく道のキャラクターを作っていく。

町を束ねる軸線

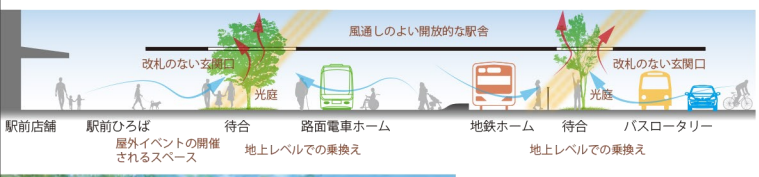
駅の南北を結ぶ道を歩行者の軸とし、並行して走る路面電車の通る道を交通の軸とする。軸の南端に駐車場／市場を設け、通過交通を抑制する歩車間のインターフェイスとする。学校地域をつなぐ道を隔てられた町の東西をつなぐ架け橋に設定する。歩行者の軸は網状に広がる住まう道と絡み合い、駅を中心に町に回遊性を与え、町を結びつける。

住まう道から生まれる寄り添う町

住まう道のデザインによって道ごとの主な利用者や関連要素を住民に認識させる。住まう道沿いの使い方、新しい建物の用途、イベントの企画などが認識に基づき一貫性のあるまちづくりとして展開されていく。住民主体で寄り添う町が形作られ、内から活気の生まれる居住特化地域として、多くの人に長く住まわれる場所となる。

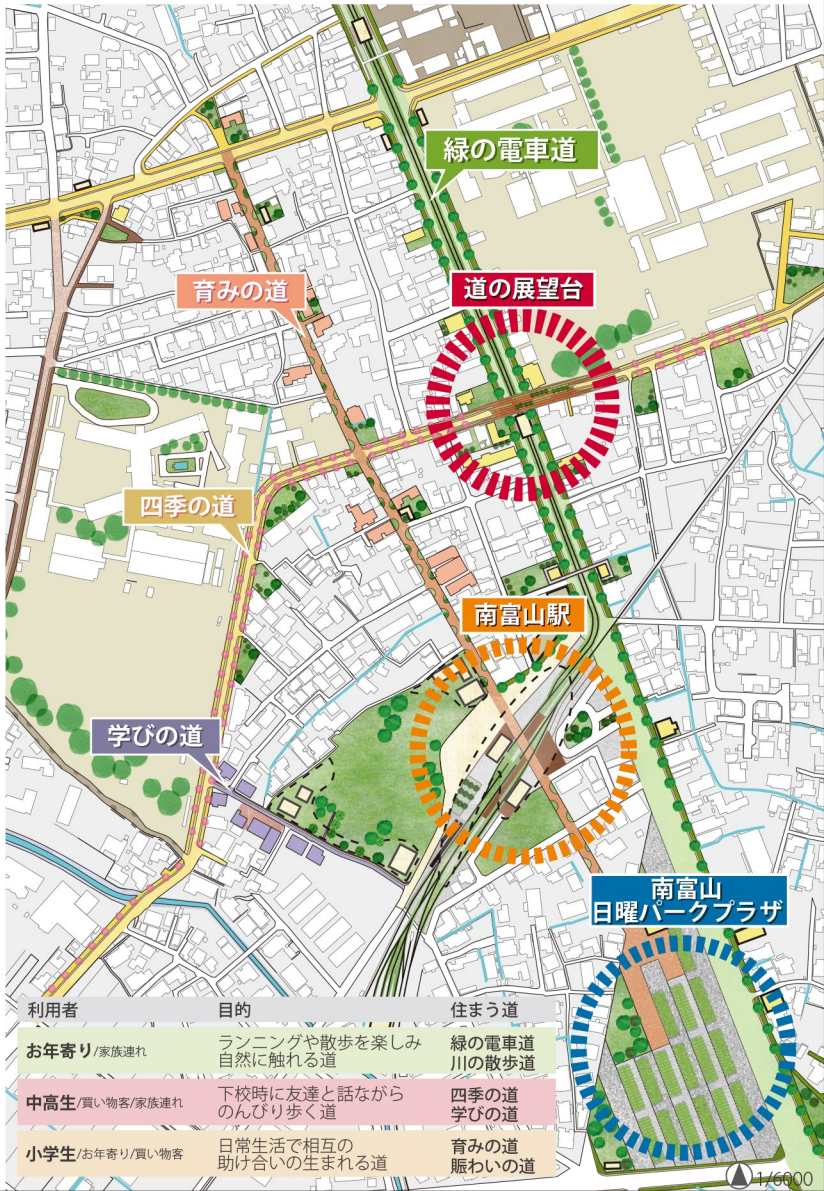
道＝町＝駅

路面電車の駅は改札を必要とせず、高低差のないフラットで、道・町と地続きの駅とすることができる。駅の形式はそのままに、周辺の商店街や広場とより結びつきの強い駅を計画し、電車を待つ人と買い物をしたり本を読む人と入り交ざる場所とする。



大通りに面する市場

旧街道に面した位置にパークアンドライド用駐車場を計画する。交易の道、ブリ街道と呼ばれるこの街道沿いに地元の食品などを売買できる日曜市を行い、地元の物に触れる機会を作る。同時に交通量の多い幹線道路沿いに駅へのアクセスの為の駐車場を計画し、自動車流入を抑制し安心して歩くことのできる道とする。



利用者	目的	住まう道
お年寄り/家族連れ	ランニングや散歩を楽しみ自然に触れる道	緑の電車道 川の散歩道
中高生/買い物客/家族連れ	下校時に友達と話ながらのんびり歩く道	四季の道 学びの道
小学生/お年寄り/買い物客	日常生活で相互の助け合いの生まれる道	育みの道 賑わいの道